

研究会記録

チッソ労働運動史研究の経過と課題
研究会記録の公開に寄せて

熊本学園大学社会福祉学部教授・水俣学研究センター長 花田昌宣

熊本学園大学水俣学研究センター研究助手 井上ゆかり

はじめに

水俣学研究センターでは、2006（平成18）年10月にチッソ労働運動史研究会を立ち上げ、新日本窒素労働組合（以下、新日窒労組）の資料整理に取り組むと同時に、日窒、新日窒そしてチッソと社名を変更してきたチッソ株式会社の労働運動史の記録に取り組んできた。当初、組合労働者のヒアリングをベースにした討論研究会として始めたのだが、その研究会自身が労働者にとっての自らの歩みの発見の場となり、また貴重な記録（オーラルヒストリー）採録の場となった。『水俣学研究』創刊号では、安定賃金争議の労働委員会斡旋をめぐる中心的作用を果たした荒木誠之氏を迎えて行った第14回研究会の記録を収録したが、本号では、その第1回の研究会記録を収録する。

なお、この研究会を立ち上げるに至った経過と課題について整理することを通してこの研究会の意味を明確にし、研究会記録の解題としたい。

研究会開始に至る経過

2005（平成17）年に立ち上がった熊本学園大学水俣学研究センターは、同年8月水俣市内に水俣学現地研究センターを開設した。ここに至る大きな契機¹⁾の一つは、新日窒労組の組合資料を受け入れ、整理し公開利用可能にして行くという大学の研究者側の意図と資料を残したいという元組合員たちの意思であった。その経緯については『新日本窒素労働組合旧蔵資料目録』の解題²⁾および資料展図録解説³⁾に簡単に記した。また、この新日窒労組旧蔵資料の整理公開は、2005年度より水俣学研究センターが受けた研究助成「私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター事業」の第三プロジェクト「水俣学関連資料の収集および解題のデータベース化による世界的発信」に位置づけられた。

- 1) 現地研究センターの開設の意図としては、もちろん、現地に学び現地に還元するという水俣学本来のねらいがベースにある。学内的な経緯については水俣学形成史という観点からいづれ明らかにしたいと考えている。
- 2) 『新日本窒素労働組合旧蔵資料目録』熊本学園大学水俣学研究センター、2009年3月
- 3) 花田昌宣「新日窒労組の闘争と水俣学研究資料の意味」『新日本窒素労働組合60年の軌跡』熊本学園大学水俣学研究センター、2009年、pp. 3-10

それらを受けて、2006（平成18）年秋より、チッソ労働運動史研究会が立ち上げられたのである。本号に収録したものは、その第1回研究会の発言録である。これまで14回にわたる研究会を開催しており、会の記録自体が貴重な内容を有しているので今後掲載していく予定であるが、それに当たって、この研究会の趣旨と経過を記述しておきたい。

新日窒労組解散および資料の保存方法が話題に上った2003（平成15）年後半ごろから、熊本学園大学社会福祉学研究科花田研究室では、研究課題の一つとして取り上げることを企図し、地元労働者たちと協議を始めた。また、元組合員自身の手による組合資料整理作業も開始した。おりしも「水俣病事件史におけるチッソ労使関係と企業発展の軌跡」という研究課題で科学研究費を受けていたので、その中の課題の一つとして位置づけ、調査研究にかかる費用を捻出した⁴⁾。また、大学院生の深草雪英が修士論文の研究として取り上げ、資料の読解と労働者のヒアリングを重ねて、研究をまとめた⁵⁾ こともこの研究に弾みをつけるものであった。また、2005年8月には、大学院修士課程の福祉環境学フィールドワークⅠと題された水俣地域における第1回目の臨地研修においても、チッソの労働者と労働組合をテーマの一つとして設定し、組合事務所でのヒアリングを実施していた⁶⁾。

組合は、2006年1月、組合の解散を記念する事業の一つとして、新日窒労組の軌跡を描いた写真集⁷⁾を刊行した。それを受けて、花田が、この写真集の編集に当たりまた組合資料整理に直接携わっていた元組合員のうち、最年長であった小形喜代太氏から、組合の歴史を写真集をベースに聞き取る作業を開始した。組合資料の整理・目録作成作業と並行しての聞き取りであった。

やがて、個別の聞き取りではなく、退職労働者たちからのグループ討論をしてはどうかという元組合員からの提案もあり、いわばフォーカスグループインタビュー方式で、語り合う中から事実を掘り起こす作業を企画したのである。この段階では、資料はまだ整理途上であり、直接資料に当たることは目録作成作業に混乱を来すことも考えられたので、ともかくも、議論を開始することにしたのである。これには同時に、元組合員自身の語りによる組合運動史の記録を作るといふねらいも含まれていた。

そこで、花田が呼びかけてチッソ労働運動史研究会を立ち上げることにしたのである。第一回の研究会が開かれたのが2006年10月20日であった。

なお、この研究会は名称を「チッソ労働運動史研究会」としているが、この名称に関してはある退職組合員から異議が出された。というのは、労働組合の名称は「新日本窒素労働組合」であり、チッソ労働組合は1962（昭和37）年の安定賃金争議の際の組合分裂によって結

4) 花田昌宣・酒巻政章「水俣病事件史におけるチッソ労使関係と企業発展の軌跡に関する研究」（研究課題番号：16530198）、2004-2006年

5) 深草雪英『水俣労働者による安賃闘争の意義：原資料の読解と聞き取りから』熊本学園大学社会福祉学研究科修士論文、2005年1月

6) 2005年8月8日、新日本窒素労働組合事務所において、江口正安氏（新日本窒素労働組合元書記長）、徳田嘉蔵氏（新日本窒素労働組合元執行委員・元水俣市議会議員）、山下善寛氏（新日本窒素労働組合元執行委員長）からのヒアリングを実施。

7) 『創ったそして闘いぬいた』新日本窒素労働組合写真集編集委員会、2006年

成された第二組合の名称であるから、チッソ労働運動といういい方は承服し難いというものであった。私としては、新日窒労組の運動史ばかりではなく、現社名チッソという企業の歴史と労働組合運動史をたどろうという考えにたち、新日窒労組が中心となるにしても、下請けの労働組合や関連する地域の労組にも視野を広げて行くことを企図していたので、必ずしも議論がかみ合わないまま今日に至っている。今後研究会名称の変更があり得るが、本稿ではチッソ労働運動史研究会としておく。

次に、当時この研究会の課題を明確にするために研究計画を作成していたが、それをベースに若干リライトしつつ、この研究の趣旨を改めて記しておく。

チッソ労働運動史研究会の背景となるいくつかの要素

この研究会を進めるに当たり、その背景にある問題意識といくつかの課題を列記しておく。

【企業内労使関係と企業発展の軌跡】

2006（平成18）年は、水俣病原因企業チッソ株式会社が創業百年を迎え、また、水俣病事件は患者発生の公式確認から50年を迎えた年であった。ここで、改めて、この歴史の発展の中に、企業内労使関係と企業発展の軌跡を位置づけ、事件史を解明することを本研究の基調に位置づける。

【組合資料と労使関係史の記述の重要性】

新日窒労組は、1946（昭和21）年に結成された日本窒素水俣工場労働組合を前身とし、組織再編を経て1951（昭和26）年に現在の名称になった。この労組は、2005（平成17）年、最後の組合員の退職により解散を余儀なくされた。この組合の結成以来の資料（以下、新日窒旧蔵資料）が、廃棄されることなく保存されており、労使関係研究史上、極めて貴重な資料と言える。この一次資料と元組合員自身の語りによる労働運動史を、チッソ労使関係史を記述していくことが可能であり、必要である。

【60年代大争議の経験】

この労働組合は、もともとは企業内の労使協調的な組織であったが、1950年代後半、身分制撤廃闘争（工職分離の撤廃要求）を実施する過程で、対立と協調を内包した労使関係制度を形成していく。日本経済が高度成長を謳歌しようとしていた1962（昭和37）年、そしてまた日本の労使関係が安定的協調的労使関係の構築へと向かう中で、組合員数3000名を超える大工場で、会社側の「安定賃金制度」導入を巡り、日本の戦後大争議より遅れること10年、1年間近くにわたるストライキを含む大争議を展開された。多くの争議と同様、第二組合の結成・組合分裂を経験するが、新日窒労組（第一組合）は長く多数派として、労使関係の要の位置を保ち続けるという希有な経験をしている。

【研究史の弱さ】

ところが、熊本県最南端に位置するこの工場および労使関係に関しては、これまでの研究

史においては、安定賃金争議にかんする若干の記述的研究を別にすれば、ほとんど取り上げられてこなかった。

【水俣病原因企業】

また、この企業は戦後産業発展史の中で電気化学産業におけるリーディングカンパニーの一つとして重要な位置を占めつつ、その一方で有機水銀をはじめとする有害重金属を排出することにより、未曾有の公害の水俣病を引き起こした。

【水俣病患者と連帯した原因企業の労働組合】

また、新日窒労組は、総評・合化労連傘下の企業内組合でありつつ、水俣病被害者の支援の立場を明らかにし、企業犯罪を告発するという、労働組合としては実に希有な経験をしている。この点もまた労使関係研究史上、注目されたこともない。

【水俣学とチッソ研究】

以上の点をふまえて、本研究は、水俣病発生原因企業チッソの企業の特質を労使関係の面から明らかにすることによって、究極的には、負の遺産としての水俣病事件の解明に社会科学の面から貢献することを課題としている。

<本研究の目的>

水俣病事件は、一方で水俣という地方都市に起きた事件であるという側面、他方で国家的な公害事件であり産業政策および公害対策の課題であったという側面をもつが、いずれもチッソという企業自身が持つ特質と密接に関連している。この研究においては、労使関係の発展を企業展開との連関においてとらえることとする。とくに企業財務戦略や企業組織および戦略との関連においてとらえ直すことも射程に入れている。退職労働者、元組合員からの聞き取りもその中に位置づけられる。

<先行研究>

チッソ企業史研究に関しては、多くはないが、産業史的な観点から矢作正氏（浦和短大）の一連の論文⁸⁾や深井純一『水俣病の政治経済学』（勁草書房、1999年）、宮本憲一編『公害都市の再生：水俣』（筑摩書房、1977年）等があり、争議に関しては菊池昌典「チッソ労働組合と水俣病」『水俣の啓示』所収論文（筑摩書房、1983年）がある。本研究はこれらをふまえたものである。

この研究はこれまで医学や社会学あるいは法学に偏りがちであった水俣病事件史研究にも新たな光を当てることになろう。なお、労使関係と企業財務の連関をふまえて企業戦略を解明していく方法は、花田が加わった、フランスに本拠を置く自動車産業研究グループ GERPISA の第一期研究プロジェクトでとられた方法であり、大きな成果を挙げた⁹⁾。

8) 矢作正氏が1999年から2002年にかけて、『浦和論叢』に掲載されている1945年からの「チッソ史」の論文。

9) M.Fressenet, R.Boyer et alii. One Best Way?: Trajectories and Industrial Models of the World's Automobile Producers, Oxford University, 1998

また、会計情報を労使争議の利害調整機能として分析する研究¹⁰⁾もあらわれ、従来の労使関係研究に新たな貢献をもたらすものと考えられ、その方法的視点もまたわれわれの研究において活用される。

上記の点をふまえて、チッソ企業と労使関係の軌跡を明らかにする。

水俣病発生が公式確認に確認された1956（昭和31）年にいたる戦後期企業内労使関係の形成過程、水俣病暗黒の空白期といわれる1960（昭和35）年からの8年間の対立的労使関係の形成とその後、とくに1962（昭和37）-1963（昭和38）年に展開する安定賃金労働争議の特色を描き出す。水俣病裁判とその判決（1973年）の過程で水俣病被害者との共同歩調が可能になった根拠を明らかにする。その上で、水俣病裁判判決以降、被害補償による超過債務状態の企業と労使関係を検証する。

<この研究のオリジナリティについて>

公害発生企業の労使関係については先に記したように先行研究が少なく、またチッソに関してもきわめて少ない。この企業における労使関係の展開と新日窒労組の経験に関する研究は、研究の空白を埋めるという意味を持つばかりではなく、水俣病事件史の研究から取り出すべき教訓という面からも大きな意義を持つ。さらにこの研究の学術的な特色を付加すれば、労使関係と企業財務の両面から企業発展史を見るとともに、地域社会及び日本産業史の中に位置づけて検討するところにある。

新日窒労組は、1946（昭和21）年に結成され、地方都市における企業内労働組合としての協調的労使関係を維持していたが、1951（昭和26）年に合化労連に加盟し、1953（昭和28）年の身分制撤廃闘争（工職身分分離撤廃闘争）を経る中で、一定の緊張感を有する労働組合に成長しつつあった。ところが、チッソが電気化学工業から石油化学工業への転身をはかることを狙う中で、工場合理化と企業内安定的労使関係の構築を視野に入れて会社が1962年に提案した「安定賃金制度」導入をめぐる、大争議が発生し、1年近くに及ぶストライキを実施する。50年代争議の多くと同様に組合分裂を経験しつつも、争議敗北後も新日窒労組は多数派組合として残る。会社側による組合切り崩しを狙った差別的労務管理政策にも抗して組合組織を維持し続け、1969（昭和44）年には、水俣病患者の訴訟に企業内組合でありつつ、患者支援の立場を鮮明にし、経営側との対立を鮮明にしていく。

この様な希有な経験を有する労働組合であるにもかかわらず、これまで日本の労働運動史研究においてあまり取り上げられてこなかった。

この研究においては、労働組合から提供される原資料に基づく研究が可能である。新日窒旧蔵資料は組合結成の1946年から2004（平成16）年の組合解散に至るまでのものであり、大会資料や交渉資料、ビラ、会議録、組合活動記録、執行委員のメモ類などが長期にわたって保存されている。これは組合リーダーたちが資料を大切にしてきた結果であるが、一つの単

10) 醍醐聡『労使交渉と会計情報』白桃書房、2005年

組資料がこれほどまでに残っているのは希有である。この戦後労働史・労働運動史の一級資料である新日窒労組旧蔵資料の整理・保存および活用は喫緊の課題となっていた。熊本学園大学水俣学研究センターは、退職労働者たちの協力を得て、資料目録の作成に取り組み、2009（平成21）年、第一段階の整理を終え目録を刊行する¹¹⁾とともに、2010（平成22）年1月より、現地研究センターにおいて、資料公開している。この研究はこれらの資料の活用が可能であるところに必要性和優位性がある。

さらに、組合結成時からの元組合員や争議経験者さらに退職者の会（親交会）が今なお健在で積極的に研究協力を申しでてくれており、研究者と現場の当事者による共同の研究が可能である。

また、熊本学園大学が2005（平成17）年8月水俣市内に水俣学現地研究センターを設置し、その研究設備・環境を活用できることも、本研究のフィージビリティを高める重要な条件である。

研究の進め方

本研究は、具体的には次のような手順で進められる。

【組合資料の分析と年表の作成】

熊本学園大学水俣学現地研究センターに所蔵されている新日窒労組旧蔵資料を解読し事実関係を掘り起こすとともに理論・実証の両面から分析していく。また、組合運動及び企業発展にかかる詳細年表を作成する。年表は、全国巡回資料展（2009年10月～2010年1月）に合わせて、図録に収録した簡易年表を山本尚友が作成したが、組合資料に基づく詳細な年表作成は今後の課題として残されている。

【ヒアリング】

元従業員や下請け労働者、企業関係者及び地域の関係者からのヒアリングを実施する。ヒアリングと資料分析は同時並行的になされる。ヒアリングは、二つの手法で進められる。第一は、退職労働者たちに集まってもらって進める研究会である。年代を追って時系列的にすすめて、後で見るさまざまなトピックを追ってのグループ討論も実施する。第二は、高齢化する元労働者からの個別的ヒアリングである。

【記録】

ヒアリングのデータは研究補助者がトランスクリプトし、研究記録として残して行く。組合資料と並んで貴重な資料として位置づけて行くことが肝要である。なお、研究会のメンバーで元労組員である山平勝利氏が、組合資料のうちの代議員会議事録を翻刻している。

【研究会の組織と進め方】

11) 『新日本窒素労働組合旧蔵資料目録』熊本学園大学水俣学研究センター、2009年3月
水俣学研究センターホームページ上からも検索できるようにしてある。
<http://www.3kumagaku.ac.jp/minamata/>

定例的な研究会は二ヶ月に一度、水俣市に設置された熊本学園大学水俣学現地研究センターで行う。これには、原則として、研究メンバー、研究協力者、当該元労働組合員などが参加し、成果の報告や研究進捗状況の点検、軌道修正などがはかれる。

また、水俣現地における調査作業やヒアリングは、毎月一回程度実施し、大学休暇期間中には、現地で合宿をしながら進めるものとする。

研究およびヒアリングで取り上げるテーマ群

研究テーマは、時系列的なテーマの設定および労使関係と企業発展という問題構成にもとづいて立てられる。当面、組合運動史を、時系列を追って基礎的な検討を実施し、事実関係の整理と労働運動史の記述を行う。その際の主たるポイントは以下の通り。

(1) 50年代チッソと労働組合創成期

チッソの労働組合運動がいかに生成してきたのか
 戦争直後の組合結成過程／労働組合組織の成立と特色
 レッドパージと組合再編過程、身分制撤廃闘争

(2) 安賃闘争（1962年）とその後

安定賃金闘争の研究そのもの
 安賃闘争後のチッソ労働組合
 不当労働行為／労働災害／南九配転などの労使交渉と裁判闘争
 第二組合とは何であるのか、組合分裂の意味とその後
 新日窒労組（第一組合）の組合員たちの軌跡

(3) 水俣病と労働組合

恥宣言（1969年患者支援決議）以前の組合と水俣病患者および恥宣言から患者支援運動への立場の転換
 組合員の水俣病認識

(4) 債務超過企業と労使関係

県債発行方式による原因企業への財政支援と企業存続（70年代後半以降1990年代）

(5) 組合員減少と解散大会へ（2004年）

労使関係の形成と展開を産業史および企業史の中からとらえ返してみた時、下記のような個別論点の追究が必要となると予測される。資料分析や時系列的な問題を追跡するヒアリングにおいても意識して実施し、意図的にトピックスを設定する必要がある。

(1) 化学産業とチッソ企業史

水俣病発生企業としてのチッソ
 企業戦略
 国策企業としてのチッソ（戦後復興期、高度成長期、70年代半ば以降）

- 同業他社：産業史的視点から
- (2) チッソ企業財務と会社組織（および労使関係）
労使交渉および企業発展における会計情報
労使協議会及び団体交渉の再定置
 - (3) 地域社会とチッソ
地域経済社会におけるチッソと労働組合
地域労働組合運動とチッソ
チッソと子会社
 - (4) 企業内組合としての労働組合と労働組織
解散に至る過程の労働組合
第二組合の存在とその意味
 - (5) チッソ労使関係におけるジェンダー
化学産業としては珍しく女性労働者が多数在籍し婦人部が大きな意味を持つ。また争議時においては「主婦の会」の果たした役割が極めて大きい。

この研究の実施体制

【研究の環境整備】

熊本学園大学には、水俣学研究センターが設置されており、資料室、作業室、などを研究スペースとして利用する。また、本研究にかかる書籍類や水俣病事件史にかかる資料類の収集も進んでいる。水俣市内に開設されている水俣学現地研究センターを、現地における研究拠点として活用する。またすべての新日窒労組旧蔵資料全体が所蔵され、2009（平成21）年3月には簿冊単位で目録作成は完成し、研究に活用できる状態になっている。本学には「水俣学」研究プロジェクトが立ち上がっており、必要に応じて専門的研究者の助言を受けることが出来る。

【成果の発信】

研究成果に関しては、学会等での研究報告とともに、地元還元をはかるべく、成果の刊行、現地での公開シンポのおよび資料展開催を計画していた。これに関しては2009年10月から2010（平成22）年1月にかけて、法政大学、大阪人権博物館、熊本学園大学本学キャンパス、および水俣市内の四ヶ所で資料展およびシンポジウムを開催してきたところである。また、先に述べたように資料目録も公開した。今後、研究の進展状況も、学会や専門研究誌等での研究発表とともに同じくホームページで随時公開することとしている。

（資料：研究会立ち上げの呼びかけ文）

なお、資料として、2006（平成18）年10月にチッソ労働運動研究会を立ち上げた際の呼びかけ文を掲載しておく。

水俣病事件とチッソ労働運動史研究会の立ち上げについて

文責 花田昌宣

2006/10/18

はじめに

現在、私（花田）と酒巻政章先生とで日本学術振興会科学研究費を受け、「水俣病事件史におけるチッソ労使関係と企業発展の軌跡」というテーマで研究しております（2006年度で終了）。

私が社会福祉学部長・大学院研究科長の職にあり、また水俣学研究センター全体の運営・研究調査におわれ、酒巻先生も教学部長職に有り、ともに忙しさに追われて、遅々としてしか進んでいません。

やり残していることが沢山あり、継続して研究を進めようと考えています。

現在、水俣学現地研究センターに組合資料を受入れ、整理作業をしています。今年度中には、山本尚友先生の指揮の下、おおまかですがカード化が終わり使えるようにしたいと思っています。

そこで、この組合資料をベースにし、研究者も増強して、（最終的には）チッソ組合運動史の編纂につながるような研究をしたいと考えています。

（中略）

研究会の課題と目標

- ・チッソ組合資料を活用し、チッソ労働組合運動史をまとめた。
 - その作業のなかで、明らかにしていくべき論点は数多くあるものとする。
 - ・本研究は、水俣病発生原因企業チッソの企業の特徴を労使関係の面から明らかにすることによって、究極的には、負の遺産としての水俣病事件の解明に社会科学から貢献することを課題としている。
 - ・水俣病事件は一方で水俣という地方都市に起きた事件であるという側面、他方で国家的な公害事件であり産業政策、公害対策の課題であったという側面をもつが、いずれもチッソという企業自身が持つ特質と密接に関連している。本研究においては、労使関係の発展を企業展開との連関においてとらえることとする。とくに企業財務戦略や企業組織および戦略との連関においてとらえ直す。
 - ・それらを通してチッソ企業と労使関係の軌跡を明らかにする
- 水俣病公式確認たる1956年にいたる戦後期企業内労使関係の形成過程、水俣病暗黒の空

白期といわれる60年からの8年間の対立的労使関係の形成、とくに1962-3年に展開する安定賃金労働争議の特色を描き出す。水俣病裁判とその判決（1973年）の過程で水俣病被害者との共同歩調が可能になった根拠を明らかにする。そして水俣病裁判判決以降、被害補償による超過債務状態の企業と労使関係を検証する。

この研究（会）の特色

- ・ 組合資料が残っていること
- ・ 退職労働者達を中心に語り手が多くいること
- ・ 水俣学研究センターという研究調査の拠点があること

研究会の組織のあり方

水俣学研究センターをベースに研究を進めていく。

研究会事務局は、水俣学研究センター研究助手やアルバイトが担うものとする。大学の研究者達とチッソの退職労働者達の共同の研究会として進めていきたい。

研究の進め方は、専門家と非専門家の壁を越えて、共同で学ぶものが出来れば素晴らしいと考えて行く。

研究メンバーについて

花田昌宣 熊本学園大学社会福祉学部・水俣学研究センター（社会政策学・水俣学）

酒巻政章 熊本学園大学商学部（会計学）

福原宏幸 大阪市立大学経済学部（労働経済学）

富田義典 佐賀大学経済学部（労働経済学）

磯谷明德 九州大学経済学研究院（労働経済学）

山本尚友 熊本学園大学社会福祉学部（部落解放論）資料整理担当

その他、募集する

チッソ退職労働者

進め方

月に一回あるいは二ヶ月に一回研究会を開き、勉強会や研究報告、討論会を行う。必要に応じて専門家らを招聘する。資料整理は継続するとともに、資料分析に着手する。労働者ヒアリングを系統的に行う。

研究会記録

第一回チッソ労働運動史研究会記録

日時 2006年10月20日13時

場所 熊本学園大学水俣学現地研究センター（水俣市）
2階セミナールーム

参加者 花田 昌宣（熊本学園大学）
福原 宏幸（大阪市立大学）
丸山 徳次（龍谷大学）
小形喜代太（元新日窒労組組合員）
松田 哲成（元新日窒労組組合員）
大戸迫輝夫（元新日窒労組組合員）
山下 善寛（元新日窒労組組合員）
徳永 常喜（元新日窒労組組合員）
糸田 憲夫（元新日窒労組組合員）
山平 勝利（元新日窒労組組合員）
高橋 幸一（元新日窒労組組合員） ほか

記録 大澤 愛子（熊本学園大学水俣学研究センター）



第一回チッソ労働運動史研究会記録

研究会の趣旨と課題

花田 この研究会では、組合結成、身分制闘争、安定賃金争議、さらに公害発生企業の労組として患者運動支援、そして組合員減少を経て、解散大会にいたる新日窒労組の軌跡を追跡していきたいと思えます。

まず、工場の中でみなさんが何をしていたのか、何をつくって、どんな働き方をしていたのか、いわゆる工場内組織、それと組合組織の話あたりを押さえておかないといけない。一方で最先端の化学の企業ですから、その中で働いている労働者たちの姿が何なのかということと切り離しては組合を語れないということです。そのようにして組合の歴史を押さえておく作業をしたい。

いまひとつ、そうした中でいくつかの論点というか、個別の課題というのがあるんですね。ひとつは、当初、チッソは電気化学工業で石油化学にいなかった化学企業ですから、そういう中でのチッソの企業史というのが何なのか、いわゆる同業他社と比べてチッソとはどういう会社だったのかというようなこと、さらに企業の体質といいますか、企業の文化といいますか、そういうものなりを含めて掘り下げていく。

私自身は化学産業は調査したことがありません。自動車産業とか電気機器産業、いわゆる組立工程をもっている工場は、日本と、それから私のいたフランスで調査に入ったことはあるのですが、化学の会社というのは、イメージがなかなか湧きません。チッソは現在、工場の中に入れてくれませんが、労働者の目を通してそのあたりもみていく必要がある。

それと、これは酒巻先生と論文¹⁾を書きましたが、チッソの企業財務と会社の組織と労使関係、これらの歴史を振り返ってみていくということも大事ですので、これは研究者として続けていきます。

それから先ほど少し述べましたが、地域社会とチッソ、あるいは地域社会の中におけるチッソ労働者という論点は避けることが出来ない。地域経済社会におけるチッソの位置、それから地域の労働組合活動というのもあったはずです。

さらにチッソと関連企業ですね。そしてそこにおける労働者の世界というのも描きたいと思っています。

そして、これはもう本当に研究者的な関心かもしれませんが、チッソの企業内組合で

1) 花田昌宣、酒巻政章「水俣病被害補償にみる企業と国家の責任論」『水俣学研究序説』藤原書店、2004年、pp. 271-314

すから、解散に至る過程の労働組合、そして今残っている第二組合とは何なのかというところも関心のあるところです。

そのような論点があると考えていますが、議論しているうちにもっといろんな課題が出てくるかと思います。

たとえば、先日、朝鮮とチッソの関係を調べたいと東大の若い大学院生が来ましたが、そういう観点からの労働者史というテーマもありうるかもしれない。

そうした個別の検討課題とは別に、今、研究センターに所蔵されている組合資料以外の資料もいろいろあるだろうと思っておりまして、それらを集集整理しようと考えております。それから、これは前から小形さんから言われていて、とても気になっているのですが、小形さんが持っておられる写真、あるいは、その中心に残されている写真が何万点とあると思います。これを保存、整理していくというふうなことも必要だろうと思っています。それらをデジタル化していく、スキャナでどんどん取り込んでいきたいというふうなことも思っていて、そのための機械も購入してあるんです。私の今思っていることはこれぐらいにしておきまして、いろいろ議論出してもらえればいかと思います。

組合としての資料作成の試みと写真集

山下 今の話は、資料ちゅうか、資料整理とも関係してくるかと思いますが、今日、出席されていませんけれども、江口正安さん²⁾が辞められた後、『安賃闘争』³⁾という本があったが、あれ以降、組合の資料が出てないから、ぜひつくったほうがいいんじゃないでしょうかとっておられ、江口さんもその気になって、資料を集めておられました。集めていらっしゃるんじゃないかと思うんですね。お金がなくて本作りは出来なかったという事情がありますけど。

花田 山下さんの話は、江口さんに書いてもらおうということなんですか。

山下 もうまとめるのは江口さんしかおらんとじゃなかですかと。江口さんが辞められてしばらくの頃、ぜひ、そういう組合資料は残しておきたいという気持ちがあったもんですから、お話をして、で、それなりに資料は集めていらっしゃったみたいだというふうに思っているんです。だから、そのへんは聞いてみないと分かりません。

糸田 いったんはやろうかということになった。それもあの、各年齢別というのか、階層別に何人かは集まっていたいで、座談会をやって、それをまとめて必要な手を加えていこうということになったんですけども、ちょっと体がもたんということで、できませんでした。

小形 それができないというもんだから、写真集にかかったんです。私は同期やもんだから、

2) 江口正安氏は、1961年8月から61年3月まで執行委員を務め、63年4月から82年7月まで書記長。

3) 『安賃闘争183日の闘い』新日本窒素労働組合、1993年

本当は、江口、あんたがやれよちゅう形でやってたんですよ。彼は、いや俺はもう、体がもたんがていうことになった。簡単に言うとそういう言い方だったんですよ。あ、こらもうとてもいかん、これはこのままではもう、写真集も出されんし、こらあ困ったもんだなあちゅう思ってたところに、組合の写真集を作ってくれんかちゅう形で出てきたから、そういう形を考えながら写真集をつくったんです。

山下 この写真集の前にですね、解散大会⁴⁾のときに何をしようかちゅうことで、出来たらその、一人一人にですね、記録を書いてもらおうかという話も出したんですけども、それを誰がまとめるのか、そんなことはでけんぞという話になったのですよ。私あたりはどげんしてでん、やろうと言うただけ。岡本達明さん⁵⁾に言うたばってんか、そらちょっと無理というので、じゃあ、今あるやつで出来るのは写真集じゃないかということになった。でも、写真集でも出せたからですね、よかったなと思っています。

山平 解散大会のときには6名だけ残っとつとです。6名で、先輩方に協力してもらって、一応、人集めはしたばってんが、その6名がどうしようかて思て、精一杯だったのです。写真集をしようかという感覚は全然なかったたいな。金はありましたからですね、もう使ってもよかったわけですけど、要するに、さっき言ったようにまとめていろいろする人が、もう、それはあ、ちゅうてですね。したくないちゅうてですね。

私たちは、解散大会をいかに乗り切るかちゅうとで、もう精一杯だったつですよ。もう1年位前に解散大会したんですけどね。

花田 私が国際フォーラム⁶⁾で忙しくなって中断したんですが、写真集をひろげて、小形さんと話をしながら、一枚一枚、写真に写っている人物や時代背景など写真の説明を聞いてたんですね。その上で、簡単なリーフレット等をつけて、外に出せるようにしたいと考えたのです。もう数がないので、第2版を作ろうかなという想いがあるんですよ。あの写真集だけでは、部外者にはちょっと見ても分からないんですよ。

福原 分からない。

花田 経験者はどこになにがあるということを知っておられますが。

福原 タイトルでももうすでに分からない。よっぽど知ってる人しか。

小形 それと年表についても、1948（昭和23）年のメーデーからしかでていません。それあの写真集としては出てないわ。それと結局、身分制の問題とか。1953（昭和28）年ぐらいいなったら出てきますけど。それまでの間、もうほんとに、組合が、いったい組合があるのかというふうな組合だったわけですよ。

山平 写真集は年表はつけなんからですね。

写真集は予算の関係で200ページで決めとりましたが、年表とか役員名簿とかをつけ

4) 新日窒労組は、最後の組合員が退職する1年前の2004年3月26日、水俣市総合体育館で、退職者や関係者を集めて解散大会を開いた。この集会在同労組として最後の大会となった。

5) 岡本達明氏は1970年8月から1978年7月まで執行委員長。著書に『聞書水俣民衆史』全5巻、草風館、1990年

6) 2006年9月、水俣学研究センターが世界の13カ国14地域の公害被害の発生地住民や研究者を招聘して熊本学園大学及び水俣市で開催した「環境被害に関する国際フォーラム：水俣の教訓を未来に活かすために」のこと。

とかんとちょっとおかしゅうなると思って作ったのです。

小形 年表についても、1946（昭和21）年の1月26日から、とんで1950（昭和25）年の1月になってますので、この付近から、もうやっぱりずっと続いていかないかなかなあと。

山平 飛ばしてもおろし、意識的に飛ばしとるところもあつとですたい。特に、千葉に行く人が、要するに徳永さんたちが行った1965（昭和40）年から1972（昭和47）年、要するに1975（昭和50）年近くまでがですね、いちばんなんでもあった時期やったでしょ。あんころはほとんど飛ばしとっけんですね。

大戸迫 日刊で発行してある「さいれん」があるでしょう。

山平 ばっちりあります。

大戸迫 いろんな、そのときそのときで書いとるから記録が残るわけです。まあ、見るのは大変じゃけどもたい。

山平 いや、「さいれん」は大変じゃなかつですたいな。「さいれん」は製本になつとるけんな。見ろうち思えば。まとまつとるけん簡単です。

大戸迫 資料としては「さいれん」がいいんじゃないですか。その時々で開いていけばですね、そのときそのときのこと歴史がわかる。

山平 古いのはけっこうあるのです。新しいのがかえってなかつじゃなかですかね。古かとは結構みんなとつてくれてあつとですもんね。

小形 写真集の年表については、年表だけで9ページあるんだから、写真集のほうのこれがこう上がってくるわけですよ。だから細かい年表は無理なんですね。だから写真でも分からんし、年表でも分からんというのがおそらく出てくるかなあと、そぎゃん思います。

チッソの労働者の地域の評価は低かった（昭和20年代）

松田 自分たちは（考え方が）全部じゃないけど、でも断片的な気がする。ひとつの系統だったり、整理した形での問題を意識するちゅうのはむつかしかちゅう気がするわけですよ。

今いろいろ（花田先生の）問題の提起の仕方から課題とかいうのも、ひとつの系統立てて物事をずっと考え直さんといかんと感じているところです。だいたい資料を見ればですね、労働協約から何からだいたいの、もう一回自分たちが整理しなおせば何か出てきそうな気がする。

私はそこに出ていない問題というのが、逆にあるような気がします。さっきも出とつたけど、チッソというか、地域というか、組合というかですね、そういう点がです。

自分が会社に入るときに、「なんや、ぬしゃ、こげん、工員ちゅうか労働者ば差別すつところに行くことや」、こう言われたもんな。そのときには、おかしいかも知れませんが、この人は就職はできないのに、人はそんなふうに見ているのだろうか、と感じ、それがちょっとショックだったですもんね。

ただ、水俣の人ちゅうのは、チツソというものに対する見方ちゅうのはですね、憧れちゅうか立派だというふうにはとらえてなかった。労働者ちゅうか、もう本当に工員で、結局、まともに人間として扱ってもらいたいというような見方ですね。少なくとも何か、自分のうちで話が出る時、話す人は、評価はしとらんかったような感じがするわけでしたい。誇りを持ってチツソに入られた。

そのときに同級生からそんな言われたのは、1948（昭和23）年ですよ。それが、異様に、頭の隅から離れんとですよ。ただそういう付近ちゅうとはあまりこうないんじゃないかと。

だから自分たちチツソというものと地域というものとの関係についてですね、チツソは水俣になくちやいかんと言いながら、その頃の人たちはチツソに対する憧れみたいちゅうのは本当はなかったんじゃないかな。あんなに危ないところに行って、というように気持ちのほうが強くなかったかと思うのです。

山平 松田さんたちのつきあいではですね。

松田 はい。

山平 昭和30年代の初めは違うと思います。

松田 はい。

山下 私が入ったのが1956（昭和31）年です。そういう時代です。

山平 山下さんの時代か、そのちょっと前から1962（昭和37）年入社の私たちの時代ぐらいまで。要するに争議までは。それまではですね。

山下 はじめはやっぱり松田さんが言われたように、岡本達明とか松崎次夫⁷⁾とかが聞き書きしてるようにですね、その、チツソ労働者の評価というのは低かったというように思いますね。

漁民の人たちも、海でいっぱい獲れるとに何でチツソにいくとかという話があったと。チツソ自身は低賃金政策をとってるからですね。（漁師にいわせれば）海が空っぽになるかという話です。

野口遵と水俣進出

小形 地域的に、水俣は工場が来る前は、半農半工、要するに農業が主体だったでしょ。そこに工場がぼんと入ってきた。

野口遵⁸⁾という人が、これは私の考えですけど、なぜ水俣にもってきたかと考えると、人的な資源もあって、大人しいし、ということをもてるわけですからね。それと米ノ津と水俣を候補に上げていて、あの水俣になぜ持ってきたかちゅうと、あの曾木発電所か

7) 松崎次夫氏は、1970年8月から80年7月まで執行委員、80年8月から82年7月まで副委員長、82年8月から86年7月まで書記長を務めた。『聞書水俣民衆史』の取材や編集に携わった人物である。

8) チツソの創業者。水俣に工場がきたのは1908（明治41）年。

らのあの高圧線のあの敷地ですね、あの鉄塔、うろ覚えですが、20何本かですか、それを水俣のある程度金持ちが運動して、そういう人たちがぜひ水俣に、そういう形で誘致して水俣にきた。そういう経緯もあるし、野口遵そのものの体質とかそういうものも、ちゃんともとのときからそういうものを持ってるんですよね。さっき松田さんが言ったようなことを考えてた、いうことは言えるんじゃないかと。

丸山 私、不勉強なんですけど、チッソあっての水俣という意識が強かったということを知っていますが、今のおっしゃったことを考えると、人的資源はあったとか、水の便とか排水の利便性とかを考えて進出したのでしょうか。

小形 港とか。

丸山 港とか自然環境を持っていた立地条件というか、これをもっと強調すれば、水俣あつてのチッソだったと考えなきゃダメだとも思うのですが。

小形 朝鮮の興南工場もまったくこれと同じような考えだった。

山下 そうそう。

丸山 地の利が非常に似ている。

小形 ほとんど似てる。朝鮮でも周囲の朝鮮部落を買い取って、工場を建てています。

丸山 私は10年ほど前に学生を連れて工場に入れてもらったんですけど。工場をぐるっと回ったときに、名前を聞かなかったんですけど、若いクリスチャンの方が説明してくださったんですね。いちばん印象に残っているのは、水のことを説明されて、まあ今循環しているといわれ、化学工場にとって水は命ですっておっしゃっていました。どうですか、そういうふうな意識はみなさん、お持ちだったんですか。

小形 水俣川の取水場所が、工場の、ちょうどあそこのまたになっているところ。小崎といいます。あれが昔の1丈8尺、小崎のヘッドからその工場内のあそこの貯水池のところのヘッドが、昔の図面を見ますと1丈8尺と書いてあるんです。ほって、それだけの港湾で、自然の流れで流るっつです。向こうの流れで。

丸山 ああ、自然の勢いで、こうきちゃってるんですか。大量の水を使って大量の水を流すわけですね。

山下 そうです、そうです。

山平 要するに、化学工場なんですけど、電気化学だったからですね、うちは、もとが。もともとの出だしが、世界にひとつしかない、だいたいそうだったんですから。

花田 突然こういう研究会に放り込まれた福原さん、どうですか。

福原 いや、私は全く不勉強なんで、チッソの社史とかも、そういうのはあるんですか。

山下 事業大鑑があります。戦後はないんですよ。

小形 それと新しい工場が出来たときに、それと、この先の古賀の所にあれを作ったんですけど、そのときの機械の写真なんか、龍谷大学にあります。

山下 旧工場ですね。この下手は、川だったんですよ。だからこの下手に旧工場があったんです。

福原 大阪の中央市場かなにかやっていた人が、おそらく趣味で全国の社史を集めていたんです。その方がなくなったときに、龍谷大学に丸ごと売ったんです。その中に含まれてたんです。だから事業年鑑見たことあるんです。

小形 中の機械類の写真もあった。

山下 そうそうそう。

小形 ちゅうのが、私、その聞き書き民衆史を作るときに、その新しい水俣にあの、工場が来たっていうので、その中に、そういう写真を6枚だけ龍谷大学から買いました。それ1枚ね、何百円取られたかな。だいぶん取られたですよ。

小形 はい。それが龍谷大学。

山平 おっどんが、ほって工学校ん、工学校1期生だったでしょ。ほってでもう歴史は何回もせないかん。

山平 それこそ興南工場で、水俣でどげした、灌漑に利くことは、全部したっだけん。さっき小形さんじゃなかばってん、誘致したり、全部やっぱ、言うたけんなあ。なーんも、そげんた。

工場の中のことの記録

花田 工場組織とか作業組織や、どういう工程していたかというのは、ここにいらっしゃる本人たちに聞くしかないですね。

チッソが何をしていたかについて書かれた記録には会社が出した工場新聞と、水俣病に関わって『企業の責任』という本があります。それから、労働者の証言集っていうのがあるんですけど、そこで、どういう仕事をどうしていたかというのはあるんですね。ただ、今いわれたように、その工場の中に、戦前の分はある程度あるにしても、戦後、とりわけその高度成長期に入ってからどこの職場で何をどう作っていったか、レイアウトがどうなって、人がどう配置されて、どういうふうな分業が出来ていたのかっていうのに関しては調べないとわからないと思います。

山下 いや「さいれん」にですね、職場から書いていますし、合化労連の機関誌の方にも転載しとっとじゃないかな。女の人がおらしたでしょ。職場をルポというかな。

松田 ワタナベかな。

山下 ワタナベさんやったかな。それがちょっとあります。

福原 それと私、安賃闘争の意味みたいなことを技術史の星野芳郎さんが書いているのを読んだことがあるんですが、星野さんは当時、取材をなさったんですか。

小形 何回もここに来て、講演なんかもやっています。

山下 1965（昭和45）年ごろチッソの縮小撤退が問題になった時にチッソの分析をしとんのはって。資料だなにまとめた資料のあつとですよ。写真を持ってたし。

地元での就職難とチッソの評価

福原 さきほどのことですが、地域のことで、私が何か今まで読んだものの限りでは、とにかく水俣の方々にはチッソに憧れてて、そのチッソに就職すること自体はもう、これはもうすばらしいことだという、非常に肯定的な面ばかりしかないようにしか思ってなかったんですが、さっきのお話だと、1948（昭和23）年ごろは必ずしもそうではなかったということですか。

松田 私がさっき言いましたことは、何か言うなら、裏もあったなとは思ってますよ。どうということかと言うと、昭和23年というと戦後の就職難だったんです。チッソの場合は興南工場がみんな引き揚げてきて満杯であったし、しかしチッソに入らんとほとんど就職はありませんでした。

ちょうど学制改革があったから、水俣高校が昔の実業学校だった最後ですよ。同級生は1年までいって新制高校、私は旧制の実業高校出て、会社に入ったわけですけども、ほとんどどこからも就職、求人というのはなかったですね。だから私もなかったんです。

ところが私の担任の先生が、親父がまあ戦死か犬死にかしらんけど、戦死しておふくろだけだから、もうお前はよそに行くちゅうと大変だよと、何とかしてあんた地元に入れんかねといていた。他のもう高校、実業学校の就職試験は終わっていて、チッソは採らないと、要らないというのを、その担任の先生が会社に掛けおうて、試験だけは受けさせちくれて言うてから、私はまあ、そんなときの試験で何とか採るてなったんです。

他の人はみんな、仕事はなかったけど、「あんたチッソにいくとや」と、とにかくこの労働者ば、労働者ちゅうかですね、働くもんば差別する、「そぎゃん会社にあんたいくとや」と言われたのが、私は非常にこたえたですね。

だからその、我々ぐらいの年配の人間が、必ず兄貴からか親父からか、あるいは村の人たちから聞いたから、そういう話が出るのであって、私はそれは決して、ひとつの話ちゅうもんじゃないんじゃない、やっぱしそういうのが何かあつたとおもっています。

福原 地域の方々の中で。

松田 仕事がないからいく、うちはいくけども、労働災害もあって、たくさん、怪我、死んでるわけでしょというような話があって、そういうのも知ってるし、チッソの場合は身分制ちゅうのもあって社員と工員を差別しよったわけですから、そんな会社に行くとかやというのが、やはりあつたんじゃないかと思います。だから私はあんまり誇りを持っていない。

山下 就職難だから、松田さんばかりよかねて、ねたみのような気持ちがあつたっじゃないか。

松田 それに近いことは他にも聞いたことがある。

小形 それと、まだあの時分、時代にしたらヤミのほうが儲かったわけですよ。

松田 だから会社に行くにだってですね、結局給料で。

小形 会社んごたつとにいくとやて。(会社みたいなどころに行くのかってね)

山平 そらあったな。

小形 チッソんごたつとには入らんで。

山平 魚ば捕りよったけん。魚捕りどんしよったがよかちゅうな。

身分制：水俣の女性と付き合うな

松田 そういふのはある。まあ、私は全部だとは思わないけど、やっぱそういふのはやっぱしですね。

身分制撤廃闘争はあったわけですから、闘ったわけですから、それまでは、身分制ちいふのが水俣でですね、異様に大きな課題でもあったと。

小形 その写真集の中にその身分制の問題はちょっと載せております。

松田 私がちょっと載せてます。最後のほうにですね。やっぱひどいもんですから。

山平 賃金をですね、少し、社員と工員の賃金差をこう、少し載っとります。

小形 職工がボーナスの5日分しかもらわれんときに、あの、課長が半年分という差があったと。それがだいたいチッソの体質。

松田 何か月分と違ふと。だから、水俣からいく人間は、その工員の方になるたいな。

山平 地元採用は。だから第一組合は地元の人間です。

松田 なんであれ、外から入ってくるならば、もう社員。

福原 はあ。

松田 水俣の人は工員で入るわけです。

福原 それはもう最初からの決まりなんですか。学歴で？

松田 ただ私たちのときには工員は工員区長ですけん。はい。しかしそれでも他ん連中は工員長だったけん。工業の連中は工員て言うたやないかと。僕たち水俣ん連中だけは工員区長て。

小形 それでチッソはですね、地域社会に対しての締めつけちゅうのがあった。学卒が来ますでしょ。東大出の若い連中が入ってきて、これは将来、工場の幹部に就けにゃいかんちゅうのは、恋愛までストップさせたんです。止めたんです。水俣の女性とは絶対付き合うなど。それで付き合つとるのが分かんるとするともう大変でした。例えじゃないんです。これが現実だったんです。

福原 要するに、地元の人にこう、根付かない。

小形 それで、地元の人を社員に上げるといふことが少しずつあったんです。そういうふうには幹部に近いあれをつくったならば、チッソの水俣の支配の仕方が変わってくるでしょ。やっぱ、そこまで考えてるんです。水俣の女性が泣いたのが何人かいます(笑)。流れを

知ってますもん。

福原 成就できないわけですね、そこまで、地元の方は、好きになっても。

小形 絶対、そこまでやってたんです。

福原 ひいては水俣病がこうだんだん出てきたときでも、そういう力関係がはたらいたんでしょうね。すごいですね。

花田 住宅管理してますからね。社宅、社員寮であったりとか、労務管理の技術的にそういうのが可能であったということですね。それとチッソの先ほどの身分でいうと、この会社は工職身分差というのはかなり遅くまで残るんです。身分制撤廃闘争しますけれども、条件はかなり工員の側はよくしていこうとするんですが、制度的にはですね、安賃闘争の頃まで残ってるんですね。

日本の大企業では、だいたい昭和20年代の大争議で工職身分は撤廃されていくんですが、ここは制度的にはずいぶん遅くまで残ってるんです。その中にはもちろん工員の下に臨時工がいますからね。もうひとつ、もうひとつかふたつ下にぞろっといるわけです。それがあの浜元二徳さんだったり、川本輝夫さんだったり。土工で入る人もいるし、臨時工で入る人もいるし。という階層化の中で、じゃあ地元出身はどういうふうに位置づけていくか、よそから来た人はどういう労務管理の対象になったかっていうのは、あの裏づけを持って調べないといけないですね。

本工と下請工員、臨時工

福原 正社員とまた別で臨時工が相当いたんですか、チッソは。

山下 そうですね。一時期は。

福原 それは生産、その直接ラインに関わる仕事もされたんですか。いや一般的にはね、あのそのライン、メインのラインの仕事は正社員、工員さんがやって、あと、まあその製品の梱包とかね、工場の清掃とかね、そういったものをその社外工の人がまわすものなんですね。まあ鉄鋼なんかよく、組立工場の場合はラインにつくこともあるんだけど、こういう化学、まあチッソの場合はどうだったんだろう。

山平 あるでしょうね、今でもあるけんですね。

大戸迫 いや当時は我々の記憶によるとですね、最盛期はもう工場内で働く人が5,000人越しとったわけですよ。それで私が1955(昭和30)年に組合に入ったときに組合員が3,500もおったんですよ。ところがその水俣に、昔の汽車で上り下りで2,000人くらいどーっと入ってくるわけ、下請業者の人が。

下請、下請と僕らはもう呼んどったんだけど、工場内のもういろんな仕事があったんですね。僕らの製造もあろうし、たとえば今おっしゃった荷造り関係もあるし、でも完全に下請に与える仕事は別だったですね。今のようにあの現場の運転ラインの中に下請けが入るということではなくて、終戦後からずっと昭和30年代までは別な仕事につくと

いう分業ではあったようでした。あの生産ラインに下請の人が入るということは、もうこらもう……。

徳永 カーバイドはそうよ。

山下 カーバイドは、雨ん降って電気起こせば人力雇うてきて。それで稼ぎになりよった。

山平 その考えが今も生き残っとるけん、今もラインにつけると思いますが。そがなからんば、今言われるごと、普通ラインとか、だいたいもう正社員だけでは動かさんとだけん。

大戸迫 途中で臨時工いうかたちで入れたな。

山平 そうです。

大戸迫 他の部門な、まあ、我々の現場はそういうのもあったけど。

大戸迫 下請と一緒に仕事したちゅう経験はなかな。

山平 なかですもん。

山下 生産ラインな、まあ入れとらん。

徳永 カーバイドだけやったっかな。

大戸迫 暑い、きたない、何とかってやつが、外国人を入れる形でな。いわばほんちゃんだけが本工に入れたばいな。たとえば硫酸のですよ、やっかもんばトロッコで。

山平 トロッコで、そうそうそう。

大戸迫 あれはもう全然、本工の嫌がるもんだから業者に任せるとか、そういった意味でな、あの生産ラインの中には本来30年までは記憶はありません。

松田 だいたい梱包ですね、それからなんですか。

山平 運搬。

松田 運搬、梅戸港から、引込み線入ってますから、そういう貨車の積み込みとかですね、そういう、だから一日に肥料なんか昔は俵やったからですね、ああいうのを結局その一人一日、結局何百、そういう格好で、結局、運輸、梱包、そういうのを下請で。

福原 というのは、その、碎石工。

松田 碎石工。

大戸迫 そうですねえ、要するにあの頃は機械化されてなかったから、全て人員ですから、もう、全て人がいっぱい要ったわけですね。ベルトコンベアあたりが入ったらどンドンどンドン下請にいったんでしょけども。

福原 それはチツソの子会社と考えるといいんでしょうか。

山平 だいたい出だしが日空運輸から扇興運輸になったち。

小形 いや、富沢組というのをつくったんです。というのが、チツソの下請の原点というのが、チツソが便利にするために富沢組というのをちょっとつくったんです。扇興の前身というのを。

高橋 今でこそ、そん延岡じゃ、大企業じゃち、おるわけたいな。

大戸迫 やっぱりチツソのその経営方針、要するに安くあげるためのシステムですよ、これは。

興南工場の朝鮮人の扱い方と身分制、朝鮮人労働者

福原 まあその身分制の問題ですけど、それ以外にも入れて、それでまあおやじさんが後継いで、まあ、その下を見てて。

大戸迫 そうなんです。もう我々がなんののかんの言うけど、まだ我々の下にまだいっぱいおったわけですか。結局、会社の方針だと思うんだけど、お前たちよか、お前たちの下におるじゃないかという指導をして、不満を抑えるというような政策ば採ったんですもん。ようみんな下ば見れと。

大戸迫 とにかくチッソが興南でやったシステムでしょう。それをそっくり引き継いだから、終戦後、8割おった興南工場がもうダメになって、そこの社員がどんと引き揚げてきた。そうするともう、彼らは飯も喰わんばんだけんですね、結局、水俣工場じゃものすごい葛藤があつたて聞いたんですよ。

もう水俣生え抜きは追われてしまって、朝鮮の興南から来た人が主導権握るちゅうことはもちろんなかったとですか、仲間に飯出さにゃんちゅうとが現実だったけんですね。終戦後、1947（昭和22）、1948（昭和23）年ちゅう時代はですね。

それで、興南工場から来た人たちが結局、実権握って、水俣工場生え抜き人たちはもう全部追われてしもうたちゅうことを、水俣工場側におった学卒の社員からいろいろ聞いたんですけどね。ですからもうあとのシステムはどうも。

安賃闘争の頃はそれを変えたいんじゃないけども、朝鮮でやったことをやっとならないかちゅうことをペンを使って書いてるもんだから、それをもう調べたんですが、どうもそういった、朝鮮で韓国の人をじゃんじゃん、欲しいままに使って儲けた味が忘れられんから、水俣でもやっとなだよと。

その中味がそれまでは工具だ、社員だ、であるけど、工具の下にはまた下請が何層にもおったと。下請の中にも正社員と、また下請の中にも臨時ですか、そういったはずです。ですから、思えば教宣のピラを配るときにですね、もうすごいんですよ。上り下りの時間に合わせてちょうど水俣に出勤に合わせて電車が入りよったですから。すごい人数がどーっと来よったですから。で、そうですね、もう正規従業員が3,000人ぐらい、中に入るとる人たちは5千何百ですから、2,000人近くは、その一時期は下請で働きよったですから。

山下 一時は朝鮮の労働者ちゅうとも職場におったっじゃろ。職場でそぎゃん話聞いたことがある。

大戸迫 戦時中から終戦までずっとおった。

小形 終戦まで。

大戸迫 終戦までずっとおって、終戦後、主に北に帰ったたい。

福原 その朝鮮の人たちも工場に終戦を迎えたんですか。

大戸迫 そうですね。なんかしらんけども、韓国だからちゅう条件で、韓国の人を、前は日

本だったからですね。

福原 ああそうですね。

大戸迫 それから、あの結局ほら、もうよう知らんけども「ハンバ」で呼んどったんですが、そこにひとつの部落を作って、そしてそこに住まわして、その人たちがいちばん過酷な労働をしょったですよ。

福原 何人ぐらいいたんですか、最大で。

小形 そうですねえ…、仕事としては例えばあの石炭、あのカーバイド工場なんかは、石炭の運搬とかいわゆる力があるような、そういう仕事についてたんですよ。

大戸迫 やっぱり労力なんですか。

山平 カーバイドは人がおらんとでけんだったけんですね。

山下 カーバイドの他にもおったでしょ。

大戸迫 硫酸、硫酸の……、もう真っ赤なやつを。

小形 それと火力発電所。火力でしたらやっぱり石炭たいてやるという、そういうような。

大戸迫 で、そのあとを下請に任せたっじゃなかるか。終戦後は、向こうは潰したから、使えんから。そのあとを下請がやったっじゃなかるうでしょうかね。下請が要ったっじゃなかるうか。下請に任せたちゅうか。

水俣の朝鮮人女性

花田 これは、高教組委員長で退職された上村先生が、どこかから調べてきて、水俣の丸島に慰安婦がいたと聞きました。

小形 今、工場の裏門ちゅうのがございましてですね、その近くにですね、谷川か何かございまして、あの流れのなかに。それでよくいろいろ子どもなんかもからかわれたりしたなんちゅうのを、これ聞き書きの中には井上くんがしゃべったかな、なんかそれに書いてあると思う。

大戸迫 女郎屋。

小形 そうそう、朝鮮舟て言いよった。それで、そういう専門で、安かったっじゃないかなあ、私たちはようわからんけど。

小形 通りとしてはあの、丸島の通りです。

花田 要するに売春宿ですよ。

小形 そうです。そこに。

花田 朝鮮人女性がおったっていう話ですか。

小形 はいそうです。

大戸迫 それは戦時中でしょうね。もちろん戦後は。

山下 朝鮮のも出来とる。

徳永 韓国人専用。

山下 朝鮮人のも出来とったろ。

山下 丸島漁港には、いちばん端に、旅館のごたつとがあったがな。なんやったかな、あの。

山平 あの境橋んとこですか。

山下 そうそうそう。

小形 だいたい売春禁止法が1958（昭和33）年です。

山下 丸島は店屋はなかったばってん、建物は残とったいな。柳の木があって。こういうとなんだけども。

小形 いろいろとあの付近があった。

福原 みなさん、組合運動の本塁よりも、その陰の…。いやでも、こういうのも大事や思て。いろいろ出てきますね。先が楽しみ。

チッソの技術の秘匿と水俣規格

小形 工場そのもの、チッソそのものというのが、今さっき花田先生が言われたように、東芝とか日立とかみたいなその製作工場的な感覚で、でまた私もその工務関係にいました関係で、その技術者の連中よりもやっぱりそのなんかプライド持とったんですよ。

というのは、自分たちが、例えばひとつのコップを作るにしても、型、木型から作って、そしてこういう型に作ってこうします、というのをちゃんと最初から最後までやるわけです。そして自分で作って据え付けてみて、でそれでうまくいくか。

チッソはそれを非常に内緒にしたがった。みんな、社外に出したくないちゅうのがものすご強かったんです。極端な話は、たとえば、パイプラインがありますね。それにバルブを一つつけるわけです。そのバルブの穴の位置を、接続規格をわざわざ作って、よその工場にぼんと持っていっても合わんように作らせる。そういう作り方さしてたんです。それがチッソの体質なんです。

山平 おら知らんばってんが、小形さんとか松田さんとか徳永さんとか要するに設計屋さんとかそういう関係の人は、会社からでも結構評価はよかったでしょ、他の製造現場と比べても。

山下 工場で。

山平 工場の中でもです。こういうおんなじ労働者のなかでも、そういう人たちはさっきいうたごと技術も持とらすけん、そういうのがあるけん、普通の製造現場にだっでんいって、だっでんちょっと出来ることとは全然違いますから、会社の評価は違う。たしか。

福原 そういう設計、設備に関してずっと、常時人が張り付いてるわけですか。

徳永 水俣は工作は一貫ですよ。工具なんかでも1台買って、それをスケッチして、後はもう全部作る。器具材にしても1台買えば後の器具材は全部作る。それがチッソのまあ技術だったんですよ。

福原 だけどさっきのパイプとかね、そういうところまでやるっていう。

小形 要するに、ちょっとよそに出されても使えんようなやつを作りよったんです。

徳永 水俣工場規格。

山平 そう言うたらチツソ規格とかなんとか言いよったけな。

福原 チツソ規格じゃなくて水俣規格。この工場だけですか。

山平 そうそうそう、水俣の工場だけですね。

大戸迫 高い技術は技術だったんでしょね。ほらよく伝説の人をよく聞きよったんですよ。

九州大会で優勝だったとか、日本大会で3位入ったとか、浜野勘四郎さんとか名人、うまい人がですね、とかあの、江口静一さん、江口弥次郎さん、というもうとにかく軍需部門ですよ、戦時中。そういった試合形式の技能大会じゃもう2位、3位に入るくらいの方がぞろぞろおったんです。

その歴史を作っとるもんだから、徳永さんが言ったように一貫して、鋳型から始めて作る技術を持つとるわけ。ぜんぶ工具なんですかね、社員じゃなくて。もうそういった人がもうかなりおって、もう今その歴史、技術を引き継いだのが小形さんたちで。

福原 それと基本的なことて恥ずかしいんですけども、水俣工場ってのはチツソ全体の中ではいわゆる製造工場っていうのは水俣だけですかね。戦前、戦中、戦後のしばらくの間は、本社は大阪ですよ。

山下 そうです。

福原 工場は水俣だけなんですね。

小形 そういうことですね。

福原 もちろん朝鮮はありますけど。

山平 それと、あすこもほれ、延岡もほんなこて最初はチツソで。

福原 財閥解体で独立してますね。水俣工場、水俣工場っていうと、他にも工場があるような聞こえ方なんですけど、ここがオンリーワンの。

山下 そうです。

福原 製造としては。だから技術部はここしかないんですか。

山平 今は。昔は横浜に中央研究所があったです。

福原 横浜。

山平 もう今は、売ってしまいましたから、ないんですよ。

福原 するとわかりにくいな。チツソが作っている製品というのはほとんどが最終製品ではないですね。

山下 そうです。

福原 そうするとさっきおっしゃってた、この工場の中での、それこそパイプだなんだっていうのは、そういうオリジナルなものを作るということは、ここでの製造過程を自前でまかなってるんですか。

山下 そうです。

- 大戸迫 よそに売る品物じゃなくて、自前のいわばパイプライン、機械のことなんですよ。
- 福原 ですけど、最終製品作ってる会社と、中間物質っていうかそういうのを作ってる会社っていうのが、体質的に変わりうるのかなっていう気が、ちょっとするんですけど。つまりお客さんは一般消費者じゃないですよ。企業ですよ。
- 山下 そうです。
- 福原 しかもその企業の多くは関連企業になるんですかね。
- 山下 いわゆるそういった意味ではものすごく新しいのをどんどんやっていったから、よそがそれを真似したら困るというのがあったと思うんですよ。製造部門をまねされたら困ると。それでずっと儲けていったわけですからね。
- 福原 さっき安上がりっていうこともおっしゃってたですね。
- 山下 それも安上がりです。
- 福原 自前で技術者抱えて、設計も抱えて、やったほうが安上がりと。
- 山下 安上がりです。
- 福原 賃金たたいて作るわけだ。
- 小形 よそにも漏れない。それがいちばん。
- 大戸迫 だからいいか悪いか別にして、かなり頭のいい、その東大とか技術の勉強しとったですから、技術はよかったんでしょうね。だから水俣病という病気まで作ったと（笑）。とんでもなか。
- 山下 よそになかやつを。
- 花田 この会社はととても儲かっていたんです。だから工作機械から始めても元取れるぐらい儲かっていたんですね。それで先端の製品を作ってたんで、そういう意味では特許だらけですね、この会社は。
- 大戸迫、山下 そうです、そうです。

熟練工の職場の実権と労働組合

- 花田 同業他社のように石油化学に入ってなかった事業ですから、プラスチック材なり、なんなりここでしか作ってない製品、マーケットシェアでいくとかなりの部分を持っている製品をいくつも持ってるわけですね。だから、ある意味独占価格、寡占価格で自分のところで設定します。そのなかに今言った工作機械から何から全部自前でやってもやれるだけの資本力はある。それだけの技術力は、エンジニアは東大から来ます。工員サイドでいうと今日来ておられるクラスの、それを受けるだけのいわゆる熟練工が延々と居続けたんですね。実はその人たちが組合の中心にいるという仕掛けになっていると思います。
- 大戸迫 おっしゃるとおりです。
- 山下 そこが強かったと思うんですよ。第二組合にいかないというのがですね。

花田 だからそういう意味では、組合の強さっていうのはそこにありますね。だから仕事出来なかったら第一組合っていうのはどうなっていたか分からない（笑）。実は怠け者もおったろうし（笑）。

大戸迫 それは言えますよ。いわゆる職場の職長さんですね。これは社員じゃない。社員と工員の間における職長クラスが全部、ほとんど残ったんですから、もう実力者が、地元の出身者で。

実力者だったばってんが、その人たちがいわば、私、工場において見とったんですが、職場にも人望のある人たちがぞろりと第二組合にいったら、もう組合はふっとんどったですよ。いちばん会社が欲しがっている職長といわれる人たちが、これは頑として第一組合に残っているから、職場も掌握しとるわけです。社員じゃないですよ、会社の、工員の上のほうだけでも、その現場を掌握しとる人たち、当時、40代ですかね、その人たちがほとんど第一組合に残ってくれたんですよ。それでですたい、組合ももったと思うんですよ。

でなきゃ、いわば現場を引っ張る連中がぞろぞろ会社側にいったんじゃ、一回で潰れる。それで非常にまじめな人で、私の知っとる人もおるんですが、非常にまじめな人で、おれは会社で飯を喰っとんだと、会社に足を向けて寝られんぞというような感覚の人あたりもおったんですよ。もうその人たちが、さあストライキ、いわば安賃闘争になって、会社のやり方がわかってきたわけですね。こうなるととても怒ったわけですよ。それがひとつとてころにがーっと固まったという原因だったですね。

第二組合が出来たときは、第二組合が1,000人超したらダメぞというようなことを我々は覚悟しとったんですよ。ところが、はじめぐわーっと増えて、後はぱっととまった。で、みてみたら、そのいちばん頼りにしとる、いわば職長クラスがてこでん動かんちゅうてくれたというのが、あれが不思議というか。いま話に出た技術のある人、その職場の神様クラスが残ってくれたということ、ちゅうことはそれだけみんながもう怒ったんでしょな。

山下 身分制の残ってくれとったけん。

花田 それはね、さっきの話ともつながって、制度上の身分制が残っていたので、新日鉄っていうか八幡製鉄が1959（昭和34）年ぐらいに大争議するときに、作業長制度を導入して、職長クラスを非組合員にしていくんですね。それで組合を弱くしていくっていう経緯があったんですが、チッソの場合にはその、僕はたぶんそうだろうと思いますけれども、身分制の制度の形が残っているもんだから職長クラスを非組には出来なかったんでしょな。

山下 そうです。課長以上が組合員。

花田 だからそのへんは、どういう労務政策をとっていたのかをみてみないと分からないですけどね。で、その人たちが職場で実権を持ってるわけですから、そこが動かないといくら上が言ってもモノ作れないっていうふうな仕掛けが強かったんでしょな。

大戸迫 ああそういうことです。小形さんたちのような「職場の鬼」さんクラスがですね。カーバイドの職長だったが、仕事にならんとですたい、全部行かんから。

ロックアウト⁹⁾の後は、会社は四苦八苦したんですよ。技術者はいない、おらんから。だからそういった人たちが全部第一組合にそのまま残ってくれたちゅうことが、後の闘いの発展といますかね、私はちょうどその組合におったもんだから、そこにおいてもうあとは耐えるかなあというふう思ったんですよ、その地元の先輩たちを。でも何でだろうなあ、あれはその…。

今後の課題

花田 はい、面白くてキリがないのですが、まずこういう勉強会を続けていくと、始めていきましようということでもよろしいでしょうか。

具体的に何をどうしていこうかということを考えていかないと行けないのですが、今出た話で、テーマ別、年代別、階層別の座談会あるいは討談会が出来るかなあと。

福原 えーっと、これ何年ぐらいの計画で、どれぐらいのものを最終目標にしてるかにもよると思うんですね。ちょっと聞くと、だいたい5年ぐらいですかね。たぶんあのこれぐらいの資料もあるし、みなさん方に聞いてもあるし、これまとめたらかなり書けるし、それは大事なことだと思います。

一方で、記録ね、読んでもらえるようなコンパクトなものもあると面白いとおもいますが、とりあえず大きいのを作る、でもやっぱししかもインパクトのある内容にして、議事録、研究者なり、あるいは運動、組合運動やってる人の、こんなおもしろい運動だったんだよっていうことを知ってもらえるような形で考えたほうが、いいかなと思いますけど。最終的にはそんな目標はいかがですかという提案なんですけども。

9) 安定賃金争議が長期化する中で会社は1962年7月13日、ロックアウト通告をして、争議中の組委員を工場内立ち入り禁止にした。